

平成30年度学位記・修了証書授与式 式辞



本日、学士の学位を得た学部卒業生925名、修士の学位を得た大学院修士課程修了生220名、博士の学位を得た大学院博士後期課程修了生6名、特別支援教育特別専攻科修了生8名の計1,159名の皆さんが、2018年度卒業生、修了生として本学を巣立って行かれます。皆さんの晴れ姿を大変喜ばしく思います。本当に、おめでとうございます。御来賓の本学同窓会の青柳会長、列席の理事・副学長・学部長とともに、ご卒業を心からお祝いたします。また、ご家族、ご関係者の皆様にも、心からお慶び申し上げます。

皆さんは、本日、長い人生の新たな旅立ちの日を迎えられました。これからは若い皆さんの力で新しい社会を創ってってもらいたいと思います。社会には、様々な課題があり、皆さんはそれに立ち向かわなければいけません。社会の変化が少ないときは、世界が蓄積した知識や先人の智恵が問題解決には有用でした。

しかし、現代社会には、大きな変化が訪れています。少子高齢化、人工知能やIoTなどのテクノロジーの進化と、社会システムの構造的変化、長寿命社会など、今までに我々が体験したことの無い社会で、皆さんは活躍して頂くことになります。

人工知能、IoT、ビッグデータ処理の技術とICT技術で、様々な仕事について、人と機械の役割分担が変わってきます。電子決済（Fintech、仮想通貨、ブロックチェーン）、AIスピーカー（音声認識、対話）、顔認証などが普及してきましたが、これにより、すでに、窓口業務や、複雑であっても定型的な事務処理については、機械による代替が進んでいます。一方、これらの技術をうまく生かすことで、便利な社会が訪れます。日本が目指すのは、誰もが快適さを享受できる社会、Society5.0と呼ぶ、超スマート社会です。和歌山大学もこれらの技術

の基礎となるデータサイエンス技術教育を推進しています。変化する社会では、必要とされる知識や技術も、大きく変化します。人生100年時代に対応した社会人向けのリカレント教育も進めていきますので、卒業生も再び和歌山大学に学びに来て頂きたいと思っております。



昨年10月に、京都大学高等研究院の特別教授である本庶佑（ほんじょたすく）教授がノーベル生理学・医学賞を受賞されました。先生は、免疫を抑制するPD-1受容体という分子を発見されました。PD-1の働きを阻害することで、癌の免疫治療が進むこととなります。癌の新治療薬「オプジーボ」は、PD-1の働きを阻害するものです。先生は、「今世紀中にがんは脅威でなくなる」と心強い言葉を述べられています、また、様々な研究の芽が育つように、広く研究を支援していくことが重要と主張されています。

日本の小惑星探査機「はやぶさ2」が小惑星帯にある「リュウグウ」に到達し、小惑星の成分を持ち帰ることができそうです。「リュウグウ」は、太陽系ができた46億年前の有機物や水が残されていると考えられています。生命の起源につながる大発見が期待されています。

近年、日本を始め、世界では、大きな自然災害が発生しています。昨年6月の大阪北部地震では、私も直下型地震を体験し、すべての通信手段が一時不通となることを知らされました。7月初めの西日本豪雨では、広島県、岡山県、愛媛県で豪雨と洪水による大きな被害となりました。また、8月の台風20号、21号は、関西地域に甚大な被害をもたらしました。浸水により関西空港の滑走路が水没し、ターミナルが機能停止しました。また、タンカーが衝突して連絡橋が通行できなくなり、従業員等も含め約8,000人が空港に取り残されることとなりました。和歌山大学では、附属小学校の屋根がはがれ、図書館新棟の3階、4階部分の窓が窓枠毎剥がれ落ちました。アンテナ等の機器の損傷、倒木、浸水や、窓ガラスが割れるなどかなり大きな被害が出ました。また、和歌山県内を始め、関西の広い地域で停電となりました。北海道では、震度7の地震により、山崩れで多くの人命が失われ、液状化の被害も出ています。また、

火力発電所の損傷で、北海道全域が停電するという惨事となりました。様々な災害の教訓を心にとどめて、忘れないことが重要です。南海トラフ地震については、マグニチュード8から9級の大地震が30年以内に起こる確率が70から80%との予測があります。地震だけでなく、大きな津波も想定されています。鉄道に乗り、紀伊半島にある歴史・文化・環境・地質・成り立ち・住民の生活を学びながら、いざという時の「列車からの避難方法」を体得し、率先避難者を増やしていくことを目的に生まれたプログラムが「鉄学」です。これは、和歌山大学とJR西日本の共同による、津波の際に、和歌山の沿岸を走る列車からの避難訓練やジオツアーを組合せた鉄道防災教育・地域学習列車です。

このように、私達の周りは、様々な災害が発生する危険性が高いですが、日頃から災害に対する心構えを持ち、訓練を行い備えておけば減災につながるでしょう。

皆さんが、世界の様々な社会の変化や課題に主体的に対応し、明るい未来を見出せるように、生きがいを持って、社会の一員として活躍されることを期待いたしまして、式辞といたします。

2019年3月25日

和歌山大学長 瀧 寛和

